

特別交流会 (IVR 看護研究会) 「未来に残る IVR 看護」 IVR nursing road to the future

浅井 望美

Nozomi ASAI

IVR 看護研究会 代表世話人

Japanese Society of Interventional Radiology Nursing Chair

第6回放射線看護学会で開催されたIVR看護研究会による交流集会は、第4回放射線看護学会での交流会に続き2度目の開催となった。今回の交流集会のテーマは、第6回放射線看護学会学術集会のメインテーマである「放射線看護が拓く未来」に合わせて「未来に残るIVR看護」とした。現代社会はICT時代が到来し、AI(人工知能)の発展から社会や仕事のあり方が変わる可能性があり、医療・介護分野も例外ではないと言われている。このような社会の変化の中で、私たちIVRに携わる看護師はどうあるべきか、この交流集会を通して参加者と一緒に考える機会にしたいと思いテーマを決定した。

交流集会当日は、IVR看護研究会で作成した動画を使用し、参加者自身が行っている看護の内容を振り返られるよう構成した。動画の内容は、ある日のIVR室。看護師業務補助の目的でロボットナースが配置されるところから始まる。IVR室ナースがロボットナースにIVR看護を教育する場面を通して、自分達が行わなければならない看護とはいったい何かを考える物語となっている。また、IVR看護のロボット化を考えるにあたっては、当研究会で発表した「IVRに従事する看護師の業務内容調査—4施設で行われたTAEの業務内容の分析から—」で明らかとなった六つのカテゴリーの業務内容について考察した。六つのカテゴリーは、「メンタルケア」「異常の早期発見」「継続看護」「検査治療環境整備」「他職種への協働・サポート」「安全管理」である。考えてみると、ほとんどの業務がロボット化可能であり、まさに「私たちの仕事なくなっちゃうの？」と驚いた参加者も多かったのではないかと思う。しかし、そんな中でも私たちでなければできないものこそがIVR看護の本質であり、そして目指すべき姿ではないだろうか。

IVR看護研究会では、IVRを受ける患者の思いに寄り添った看護を大切に毎年の研究会を開催している。今回の交流集会では、患者の思いに寄り添うことの大切さやこれから来る未来に向けてさらにIVR看護を創造し発信していくという、人間にしかできないことを考える機会になったのではないかと感じている。今後も放射線看護の未来を拓いていけるよう、放射線看護学会とIVR看護研究会が協働していければ幸いである。